

西田とベルクソンにおける「身体」の意義について

——行為的直観と可能的世界——

根 田 隆 平

後期西田哲学は、中期の「場所」の思想が「弁証法的―一般者」として「具体化」され、またその弁証法的―一般者の立場が、「行為的直観」の立場として「直接化」されたところで、ほぼその完成を見る (cf. 16-7)。これは、著作としては『哲学の根本問題 続編』(1934. VII) から『哲学論文集 第一』(1935. VII) 及び『同 第二』(1937. VII) にかけての時期にあたる。

前稿では、この時期の直前(後期入口)の西田のベルクソン批判について検討したのであるが、総じて、後期入口から後期へと進むにつれて「一般的限定」の方向(即ち「個物的限定」の「否定」の方向)が強化、補完され (cf. VII210)、したがってまた「空間」や「身体」の意義がより明確になる傾向が認められる。そこで本稿では、この後期西田哲学の論理が「直接化」されたところ、即ち西田の行為的直観の立場における「身体」の意義と、

ベルクソン哲学におけるそれとの比較を通じて、両哲学に本質的な性格に関し、若干の考察を試みることにしたい。

1

まず、西田の行為的直観の立場を概観しよう。

後期の西田は、「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依つて最も深い哲学が生まれる」(VII268)という考えの下に、我々が世界において現に実在している最も具體的・直接的な在り方を、我々が「身体的自己」として「行為」し「働く」ところに見出すことから始める。そしてその在り方は端的に「道具を以て物を作る」(cf. VII37) ことであると言われる。西田によれば、人間が「道具」を持つという時、我々は既に「自己自身を形成する創造的世界」の「創造的要素」であるが、

その我々によって「道具を以て」作られた「物」は、「それ自身に於て独立的なもの」であり、「見られる」ものである (III319)。しかも、見られるものがまた道具であり、我々はそれを以て物を作っていく。即ち「見る」ことが同時に「作る」こと、「作る」ことが同時に「見る」ことであり、行為と直観は一つのものとなる (cf. III383)。ここに「行為的直観」の立場が成立する。また「身体」に関しては、「人間は身体的存在であると共に、自己の身体を道具として有つ」 (III283)。「物を道具として有つことは、逆に身体を道具として有つこと」 (III305) である、と言われる。それ故「身体」とは、「行為する」ものであると同時に「見る」ものの「見られる」ものであり、更にそれは「話す」 (III309) ものとして、「歴史的世界」全体を表現する「歴史的な身体」 (III302) とも呼ばれる。

右のことを二、三の点について多少とも詳しく見れば、まず「物を作る」ということの意義を、西田は大工の仕事や芸術家の制作を例にとって具体的に説明している (III269)。作品は芸術家の主観的な思いだけで成立するか。成立しない。「物としての制作品がそこに客観的に成立」するためには、「芸術家が主観的に働くだけではなく、客観的に物から働かされなくてはならない」と西田は言う。作品は「芸術家の主観的理想のあらわれ」ではあるが、それは同時に「客観的」なものであって、「逆にそれは客観的に芸術家を動かしてくるもの」である。つまり「制作とは主

観が客観になって物を作り、作られたものが作るものを作るということ」である。それ故「主観と客観を互いに対立させる考からは制作の意味は不可能」 (III271) となる。ここで、主観でも客観でもない「身体的自己」が「働く」ということ即ち「制作」(「物を作る」) が、哲学の最も直接的にして根源的な出発点となるのである。西田が「身体」の哲学的考察の重要性を説く所以である。

さて、この「物を作る」身体は、「理性」と「感官」の間に入るもの、それら二つがその「両端」として考えられるべきものでもある (III236)。例えば我々が「物を見る」のは「眼によって」ではなく、「身体的生命によって」であると考えるてはならない。つまり、身体的自己(生命)が眼を道具となす(行為することによって我々は物を見る(直観する))。画家の筆先には眼がついている。画家の眼は、眼のついた手で描くこと、そのことによって物を見る。そして彼の筆遣い・技法は広い意味での知識であり、「働くことが知ること」、「知ることが働くこと」なのである (cf. III230, 325)。またこのことは、そのまま思想にも当てはまる。「ものを考えるには言葉がなくては考えられない」。思想は「言語学的身体」としての「言葉」を必要とする (III277)。ものを書く人間も画家同様、理性の眼のついた手で考えているのではなくてはならない、と付け加えてもよいだろう。

ところで、自分の身体をもこの意味で道具として用いるところに「生物的生命」と「人間的生命」との違いがある (III302)。後

者は話す身体的自己として、言語まで含めて自分の身体をも道具とする。そしてそれは自らを創る歴史的世界との関係においてあり、その世界を創り、動かしていくものである。それ故、我々人間とは歴史的世界の創造的要素であると言われるのである。

但し、生物的生命においても既に、単なる器官としての眼が物を見るのではない。眼は「視覚作用によって構成せられたもの」(MM304)である。これを西田は「歴史的自然」が眼を造る、と言いつつ、そして西田においては、生物の眼を造り出したその歴史的自然にとっても「造ることが同時に見ること」であり、「自然は見つづ造り行く」と言われる。西田において、自然もまた「造形美術的」(MM301)なのである。

以上しかし、いずれにしても西田の強調点は客観的な形の形成ということにある。生物的生命と歴史的生命との根本的な違いは、後者が「客観的な形の世界」であり「逆限定」(MM36)を含む世界であるところに存する。芸術作品は作者の手を離れて「公の」(MM270)ものとなってはじめて逆に作者を動かして得る。それ故に、「作られたものは作るものを作るべく作られた」のであり、「作られたもの」と云うことそのことが、否定せられるべきものであることを含んで居る。しかし「作られたもの」なくして作るものと云うものがあふるのでなく、作るものは又作られたものとして、作るものを作っていく」(MM348 強調は引用者)、と言われるのである。そしてこの「断絶の連続」において、我々は「いつも触れること

のできぬ絶対に触れる」(同)のであると、西田は述べている。

2

一方、ベルクソン哲学において「身体」はどのような意味をもったものであるか。

『物質と記憶』(1896)の第一の目的は、「精神生活における身体役割」を規定することにあつた(MM, 200, 201)。この著作においてベルクソンは、身体(corps)とは専ら、「感覚＝運動機構」(MM, ex. 169, 172)として記憶を現実へと向け現在に結びつける機能を持つものである、と結論する。この規定は一見消極的な印象を与えるかも知れないが、こう規定された身体は、第一義的には生にとって実に重要な意味をもつ。即ちそれは、夢見がちな精神の放恣を抑え、莫大な記憶の累積を圧縮して、時間的空間的に身体が置かれている現在の状況へ的確に順応することを保障する「生活への注意」(MM, 193, 195)の機関なのである。したがってこの機構がほんの僅かぶれただけで、人間の生活体としての力強さは急速に減退し、夢や狂気の状態に陥ってしまう。「良識」的「行動人」とは、この機構が最も平衡潤滑に作動している人のことである。

さてしかし、優れて実生活に適應する良識の人、必ずしも詩人ではない。逆もまた真であらう。ここに微妙な点がある。ベルクソンは一九一一年に行われた講演「変化の知覚」において、『物

質と記憶」で明示的には述べられなかったこの点について語っている。⁽³⁾ここでヘルクソンは、芸術家とは「ぼんやり者 (un-ditrait) (PM, 151:172) であると言う。とはいっても彼はただぼんやりしているのではない。「実生活の実利的物質的側面」に対して、彼はぼんやりしているのである。そしてこれは彼の「感覚＝運動機構」としての身体が、何らかの意味で（しかしマイナスの意味での異常、即ち病理ではない）生まれつきずれているためだと考えられる。芸術家はこのずれによって実生活から遊離し、物を功利的観点からではなく「物のために見る」(PM, 153:174) ことができる。そしてこの故に、例えば画家の知覚は通常人よりも拡大されており、彼の眼は真実を見るのである。

この、「自然」が「気晴らし」に生んだ芸術家による「知覚の拡大」を更を超えて、それを方法的に深化させること、それがヘルクソンにとつての哲学に他ならない。そしてそれはとりもなおさず、「幸せな障害物」、「無限に貴重なヴェール」(ES, 57:74) である「感覚＝運動機構」としての身体、在り方をずらし変え、「現在」を「持続の相の下に」厚み膨らませ深めることである (cf. PM, 175-6:200)。再び『物質と記憶』に戻れば、哲学とは、「我々の身体構造と下位の欲求」によって構成されてしまっているこの形式を破って、我々の「精神の基礎的構造」を再発見するところ、即ち「経験が実利の方向に屈折してまさに人間的経験になるその決定的な曲り角を超えてそれを求めに行く」(MM,

205:206) ところに存立するのである。

ところで、「感覚＝運動機構」としての我々の身体を造り出した生命進化において、それはどのような意味をもつか。「創造的進化」(1907)でヘルクソンは、目的論的＝機械論的説明を排しつつ、徹底して機能の観点から生命の創造的な進化を眺めて行く。この観点からは、生物の眼のような「有機的組織」とは、いわば鱗層に突き入れられた手がそれに残した跡であって、その無限の要素相互の配列は視覚作用を消極的な意味で表現しているに過ぎない。つまり、視覚作用という問いに対する自然の回答である眼を構成する諸要素は、「使用された手段の総体」ではなく「回避された障害の総体」と見なされる (EC, 94:116)。その意味では人間の身体も、上昇しようとする生命が物質の抵抗に出合って落ち着いた「共存形態」(EC, 250:284) として、生命の努力を消極的に表現するものに過ぎない。

とはいえ、始原において相互浸透していた諸傾向をまず植物性と動物性に、次に動物性を節足動物と脊椎動物へ分岐させ顕在化させながら発展してきた生命進化における唯一の例外的な成功として、人間 (l'homme) の身体には自由が刻印されている。人間の主要な意識形態は「知性」であるが、それは何よりもまず「製作」をめざす。製作とは、物質に形を与えそれを道具に変えてその主人となること (EC, 184:210) であり、そうして人間は自己の意識を解放する。そしてそれが可能であるのは、自動性の諸機

構同士を対立させて自動性から逃れることを可能にする脳の優越意識に「受肉の場としての非物質的な身体」(EC, 265:300)を提供する言語、及び社会生活のおかげなのである。

しかしながら既に見たように、「感覚＝運動機構」である脳は、社会生活の実利的行動に関心し、我々の知覚をそれに縛りつける。また、その中枢が脳の大きな部分を占める言語活動は、「会話」(cf. PM, 90:98)に費やされ、新しい何ものも創造しない。思想の身体としての言葉は、それが身体であるというそれだけの理由で思想を殺す。それは思想の畏である (cf. DI, 98:123)。一言でいえば、製作的知性は生命を理解しない (EC, 166:192)のである。ベルクソンにおいて、知性に自然な方向を「逆転」(PM, 214:242)させて形なき形を見る「直観」が哲学の方法とされる所以である。

要約すれば、ベルクソンにおける身体とは、器官であると同時に障害でもあるという皮肉な矛盾を含んだ身体であり、それは生命にとつては足場(器官)であるよりもむしろ足枷(障害)である、ということができるだろう。

3

さて、以上見てきたところ迄で、後期西田哲学とベルクソン哲学における身体の意義の異同は、既にある程度明らかであると思う。西田の場合、身体は足場と足枷の二義性を全く同時に持ちな

がら、強調符は前者に付く。つまりそれは見られるものとして客観的な形を取りつつ見るものとして、創造のための不可欠でいわば積極的な条件なのである。作られたものなくして作るものはない。他方ベルクソンにおいては、客観的な形としての身体は創造のための絶対条件とされてはいない。それはいわば必要悪である。この意味においては、「ベルグソンの直観を音楽的と形容するならば、私の行為的直観というのは造形的とも云い得るであろう」(MGT)という西田の言葉はたしかに了解できるものである。

とはいえ2で見たように、ベルクソンの直観とは、身体の日常的習慣的な在り方を方法的に「ずらす」ところに成立するものであり、身体的自己を離れることをすぐさまには意味しない。つまりそれは、言語的身体即ち言葉も含めて、身体を意識的・自覚的に「ずらし変えることである。身体をも道具となすことであると言ってもよい。また直観が知性に自然な方向の逆転であるといっても、それは日常の世界に背を向けてそこから逃れ去ることを意味しない (cf. PM, 154:176)。逆に日常生活を深めることなのである。つまりベルクソンにおいても身体はたしかに足場ではあるのである。したがってこの意味では、西田が言うほどには (cf. MGT)ベルクソンの直観と西田の行為的直観は異なっていない。

それではなぜ、西田においては客観的な形が創造の不可欠の条件とされ、ベルクソンにおいてはそうではないのか。前稿で検討した西田の時空論における空間の絶対否定性の強調が、行為的直

観の立場において、客観的な形としての身体、意義の強調に映し直されていることは明らかであろう。しかしここでの両者の相違ははっきりした立場の違いとして認め得るものである。ここに両哲学における根本的な相違を見ることができるか。——本稿でこの点について決定的な結論を下すことはできない。ただ次のことを指摘して前稿の結論を補足しておくだけにしたい。

ベルクソンにおいて、生命・持続・「超意識」(EC, 246:280)と呼ばれるものそれ自体は、いわば差異化するものなくして自ら差異化する原理として考えるべきものであり、それは、限定するものなき限定である限りにおいて(中期)西田の「絶対無の場所」と大きく異なつたものではないと考えられる。しかし他方ベルクソンにおいては、世界の統一があるとしてみてもそれは始源においてあるであり、世界が現に「一つの体系であることは前提とされない」(cf. PM, 27:36)。また結局は同じことになるが、ベルクソンにおいて「超意識」の原理は、世界に内在する根拠でありながらも、それがそのまま現実のこの地上に適用されることはない。経験のみがそれが可能か否かを教えるからである。「自己解体しなから自らを作る」(EC, 248:382)純粹な創造と、この地球上での生命の努力(ないしその努力の痕跡)とは区別されなくてはならない。そしてその上で、幾つもの〈可能的世界〉を考へることができ。その各々の世界において生命体は、物質的空間性の許す程度に従つて (cf. DS, 272:310) その形態も様々であらうし、

我々より直観的であつたりより知性的であつたりする (EC, 267:302) であらう。それらの可能的な世界の一つであるこの地球上の、製作的知性を主たる意識形態とする我々人間は、権利上「絶対に触れ」うるとしても事実上全体として未だ殆どそうではない。——これがベルクソンその人の直観であつた。¹⁰⁾そしてこの〈可能的世界〉へ、あるいは「生ける永遠」(PM, 210:239)としての始源の統一へと眼を向けているベルクソンにおいては、形として客観化することは創造の絶対条件とはなり得ない。

それに対し西田においては、世界の基本構造を一つの論理として押さえ、その論理の同一型の下にすべてを説明していくという傾向が強い。後期西田においてその論理は、時間(個物)と空間(一般)の「絶対矛盾的自己同一」によつて代表される。そしてこの論理は、世界が「一つの体系」として自己自身を維持していくことを前提とし (cf. WB314) かつ、我々人間の世界が時間と空間という絶対に結びつかないものが結びついて成立しているという事実から出発して説明されるものである (cf. WB31, WB242)。しかし物理・生物・人間の順に世界の矛盾的自己同一が深まり、我々人間において絶対矛盾的自己同一として突き抜けると同時に、いわば頭打ちになつているこの論理は、権利上成立する唯一の現実しか映し返さない。翻つてこのことが、客観的な形の強調となつて現れ、創造されたもの即創造するものという主張につながつたのではあるまいか。

もとよりこれは一つの見方に過ぎない。生命的創造における形の意義の強調は、西田自身の体験的直観に基づいたものであろうし、またこの強調は、例えば外から見られる客観的身体の主題化と切り離せない事柄でもある。何よりも、身体それ自身の哲学的考察の重要性を説いた西田の問題提起の的確さとその思索の深さは、特筆に価するものであろう。ただそれと裏腹に、生物的生命あるいは「種の素質」(cf. DS, 291:33)の乗り超えという課題を担わされたものとしての身体が、創造されたもの即創造するものとする西田においては具体的に浮かび上がってこないこともまた事実なのである。西田自身、論文「人間の存在」(1936)において、創られたものが必ずしも即創るものとはならないことについて述べてはいる (cf. IX 48) が、西田においてこの事態の克服が少なくとも具体的課題として取りあげられてはいない。永遠の今の自己限定として形成作用的に一々絶対に触れながら現実から現実へと動いていく世界は、それでは一体、どのような方向へと進んでいくのであろうか。しかしこれは既に「歴史」の問題である。というよりもむしろ、西田において身体の問題は疾に歴史の問題でもあった。最後期西田のテクストの検討も含めて、この問題の考察を今後の課題としたい。

*西田からの引用はローマ数字で全集の巻数を算用数字で頁を、ヘルク

ソンからの引用は著作の略号・原書 (PUF) 頁・訳書頁の順に、共に本文中に示す。なお、ヘルクソンの著作の略号は次の通りである (訳書頁は白水社ヘルグソン全集当該巻の頁を示す)。

Essai sur les données immédiates de la conscience : DI

Matière et Mémoire : MM

L'évolution créatrice : EC

L'énergie spirituelle : ES

La pensée et le mouvant : PM

Les deux sources de la morale et de la religion : DS

(1) 「西田とヘルクソンにおける「空間」の意義について」『比較思想研究』第20号 (一九九三年) 所収。

(2) 前稿では後期入口の西田が直接ヘルクソンに言及しているテクストを検討したが、その限りではヘルクソンの自己には空間性・物質性がないという西田の批判は明確な意味を持たないことを確認した。このことは例えば論文「現実の世界の論理的構造」(1934)においてもまた要する (cf. VII 234) が、論文「論理と生命」(1936)ではヘルクソンとの相違をより明確に了解しうる表現がなされている (cf. VII 286-87)。また前稿で西田の時空論が「私・汝」関係を基軸としていることを指摘したが、行為的直観の立場では「私・汝・彼」関係が確立され、物としての汝の身体が表現的に私に対することになる (cf. VII 290)。

(3) なお、*Le rire*, 1900, pp.115-125 (ヘルグソン全集3、一一五—一二四頁) を参照。

(4) cf., V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, p.167.

(5) 西田はここで「ヘルグソンの生命は身体のない生命」であると述べている。

(6) 『改造』昭和十年四月号に寄稿した文章の中で西田は、「ヘルグソ

ンは創造とか時とかいうことをしきりにいうが、創造されたものが即創造するものであるということ余り考えていないと思う」とも述べている(『西田哲学——新資料と研究への手引き——』茅野・大橋編、ミネルヴァ書房、三四頁)。

- (7) なお、時空論に関しては、大塚忠秀「ベルグソンと西田における時間」上智大学哲学会『哲学論集』第6号(一九七七年)所収も参照。大塚論文は『無の自覚的限定』(1932・VI)を考察の素材としながら、「西田は、ベルグソンが質的な持続と抱えた実在の構造を、ベルグソン以上に明確に解明し得ている」と結論している。示唆的な論文であるが、私としては両者の本質的な差異の見極めの方に力点をおきたい。東西思想の比較という大きな主題へのつながりもそこから可能となるであろう。

- (8) cf. G. Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF., p. 97.

- (9) この点については別途詳細検討する必要がある。

- (10) この点に関しては、拙稿「生の充溢と死の遍在——ベルグソニスムにおける悪の問題——」平成五・六年度科学研究費一般研究(B)研究成果報告書(東京大学文学部倫理学研究室 所収を併照して頂ければ幸いである)。

- (11) 身体を忘れたデカルト以来の西欧近代哲学に対して西田の身体論が持つ意義については、湯浅泰雄『身体論 東洋的身心論と現代』講談社学術文庫(第一章)参照。また、後期西田の身体論はメルローポンティの身体論に先んじて、優れてそれに重なるところが大きい。両者は興味深い比較の対象となろう。この点に関しては湯浅同書の他、野家啓一「歴史の中の身体 西田哲学と現象学」『現代思想』一九九三年一月号所収も参照。

- (12) この点に関連して、湯浅前掲書八九—九〇頁も参照。